

## 真偽疑問文 (Yes-No Interrogative) が促す会話とは？ —OPI 形式の 2 者対面インタビューの場合—

池田 佳子  
関西大学

### 要 旨

本研究では、日本語母語話者間の OPI (口頭能力インタビュー) 形式対面会話資料を対象とし、会話分析法を用いてインタビューイが産出する質問発話の構造分析、およびその質問発話に続く回答者と質問者のやりとりの展開について質的に考察する。本稿では特に真偽疑問文 (Yes-No Interrogatives) を取り上げる。YNI は一般に単純な回答を引き出すのみであり、会話の展開への貢献度が低いとの理解があるが、本研究で考察した OPI 談話資料では、YNI は自然会話の中で必ずしも非周延的な役割に留まらず、むしろ会話の進行を促すこともあった。本稿はこのように会話展開に貢献する YNI の仕組みを微視的な分析によって明らかにしようとするものである。

### 1. はじめに

多数存在する質問形式の中でも「真偽疑問文 (以下 Yes/No Interrogatives, “YNI” と呼ぶ)」は最も基本的な質問形式である。本稿では、この YNI が OPI (口頭能力インタビュー) という特殊な会話設定下で使用された場合を調査対象とし、OPI のインタビューイとインタビューアが繰り広げる会話展開にもたらす効果を明らかにしていく。

真偽疑問文とは何か。以下の益岡・田窪 (1992) の定義が最も一般的であろう。

「真偽疑問文に対する答えは、その文の真偽を述べればよい。従って最小の形は、「はい」「いいえ」などの応答の表現を用いればよい。疑問文

の性質に応じて、述語を繰り返したり、「そうだ」、「違う（そうではない）」を加えることも多い。（益岡・田窪 1992: 138）

このように、肯定・否定回答を回答者に求めるのが YNI であるというのが我々の一般的な理解である。これだけでは単純明快なようだが、YNI は談話言語学(メイナード 2004 他)や会話分析で研究を行う者の関心を引いてやまない。管見の限り、日本国内外における YNI の会話における機能の研究の多くは英語会話資料を題材になされてきている。従って、YNI に関する発見が日本語の会話、話し言葉の文法の理解にそのまま適用できるかどうかはさらなる検証が待たれるというのが現状である。

YNI の特性を調査するにあたり、本稿では日本語教育の現場で昨今盛んに応用されるようになった口頭能力インタビュー（Oral Proficiency Interview、以下 OPI）形式で収録された母語話者間の会話資料を調査対象とした（上村コーパス<sup>(1)</sup>）。OPI が日本語学習者の言語運用能力の評価測定のパッケージとして応用されるようになって 20 年近くが経つ。OPI 研究会が 1993 年に設立<sup>(2)</sup>以来、研究会・講習会・セミナーなどが定期的開催されており日本語教育界においても重要な存在となりつつある。OPI は、日常会話と大きく異なり、試験官兼インタビューアと被験者であるインタビューイがその対話の担い手となり、約 20～30 分の会話が展開する。その間試験官が「自然な会話を想定した」やりとりをできるだけ意識しながら、被験者にできるだけ発話をさせ、その話者の口頭能力を最終的に判定する「言語資料」を抽出していく（鎌田 1996）。欧米では 1990 年代の後半から OPI やその他のインタビュー形式の口頭能力を測定する手法に関する研究が盛んになった。自然会話と具体的にはどれぐらい異なるのかを批判的に考察したもの（Johnson & Tyler 1998）や、OPI の対話の構造の理解を図るもの（Rose 1996; Kasper & Ross 2003）など、本研究の指針となる研究が存在する。しかし、英語会話と比較して日本語会話に関する知見が未だ不足しているように、日本語 OPI の会話構造を取り扱っ

た考察も未だ少ない。本稿で YNI の使用を見ることで、日本語 OPI 談話のさらなる理解に貢献したいと考えている。

## 2. 質問発話とは何か

YNIに関する調査の前提として、まずそもそも「質問」とは何かを理解しておく必要があるだろう。本稿では、会話の相手に対し、話者がまだ取得していない情報を求める発話のことを「質問発話」と呼ぶ。一般に、質問発話の基盤をなすのが、文法構造としての「疑問文 (interrogative)」であるとされる。疑問文の文構造を使用することで、その発話は情報を求めるという話し手の意図を具体化して提示する仕組みである。しかし、実際我々が作り出す「質問」は、実は文の構造を超越するところにある。たとえば例 1、例 2 のような A-B の対話があったとしよう（? は上昇イントネーションを示し、ピリオドは発話末の下降イントネーションを示す）。これらの例では、A の発話の文末に終助詞「か」や疑問詞（例：どうして、どこに）が付加されており、構造としては「疑問文」として成立しているにもかかわらず、「質問」として聞き手には理解されていないことが分かる。

### 例 1（作例）[感嘆としての疑問文]

A：今日は成人の日か？

B：早いものよね。あの子がもう 20 歳なんて。

### 例 2（作例）[不満表明としての疑問文]

A：どうしてこんなところに鶏が居るんだ！

B：そんな文句言っていないで早く追っ払ってよ。

安達（1999: 12）も、単なる「疑問文」が質問発話を形成するのではないという主張をしている。以下の2点（「不確定条件」と「問いかけ条件」）が質問文を形成する条件として以下のように提示している。

[不確定条件]

1. 話し手には命題内容の真偽判断あるいはその命題を構成する情報の一部が欠けている。

[問いかけ条件]

2. 話し手はそれを聞き手に問いかけることによって充足することを意図する。

この条件から、質問発話には疑問詞や疑問を表す終助詞など構文としての成立が必ずしも必要不可欠な要素ではないことが分かる。上記の条件を満たしていれば、いわゆる「中途終了発話」や平叙文も、質問として機能することになる。この質問発話の構文と会話における実際の機能が必ずしも一致しない。この不一致が、我々の質問発話に関する理解を複雑にしているのであろう。

安達（1999）の質問発話の形成条件では、話し手の行為に焦点がおかれているが、上記の例1と例2からも分かるように、話し手の発話がどのような社会的行為であると理解されるのか（例：「質問」ととるか、「感嘆」ととるか）は、次話者の返答によっても大きく左右される。Schegloff（1984）に指摘があるように、発話の形式がその発話の社会的行為を必ずしも決定付けるものではない。最も重要となってくるのは、やりとりの中で「質問」として機能している発話はどのようになされたか、を解明することである。

### 3. 日本語 OPI 会話

日本語 OPI 会話の研究は目下着実に増加傾向にある。OPI 会話資料を学習者による「口頭産出發話」資料として調査対象である文法構造（田中 1997 など）、音声（戸田・カッケンブッシュ 1999 など）、言語能力（横山他 2002 など）の学習過程を明らかにしようとする流れが主流であるが、OPI 会話を 1 対 1 のインタビューという社会的インターアクションの場として認識し、その中で展開するやりとりの特徴を明らかにしようとする流れも着目されつつある（石田（猪狩）2001; Ikeda, 2007; 萩原 2002 など）。試験官の会話行動について調査した文献は未だ少ないが、インタビューという特殊な設定下で行われる会話であることを踏まえると今後さらに理解を深めていくべき局面であろう。例えば、Ikeda（2007）では認識変化の標識（Change-of-State Token）として会話で使用される日本語の「あ」と、英語会話で観察される「oh」（Heritage, 1984,1998 など）がどのように使用されているのかを比較し、より親身な聞き手となり学習者の發話を抽出しようとする日本語 OPI とは対照的に、英語 OPI ではより中立的な立場から聞き手としての返答を最小限に絞り、話し手に多く話させようとする傾向が見られることが分かった。日本語ならではの会話的特徴がインタビューの会話展開に反映されるため、日本語会話の理解と同時進行で OPI のようなインタビュー下（制度化された会話）の調査は必要である。

本稿で OPI 試験官の質問發話、とくに YNI について考察するにあたり、OPI 試験官養成を行うためのマニュアル（日本語改訂版『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』牧野成一監修 1999 年出版）を参考にしたい。

「質問の型」選びが發話サンプルの質に大きく関わってくるという指摘と共に、多彩な質問の型とそれに準ずる一般的な目的、質問例、そして注意事項が記載されている<sup>(3)</sup> (p.52)。

表 1 は本稿で着目する YNI に関する記載部分である (pp.53-54)。

表 1 日本語改訂版『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』から抜粋 (下線は筆者)

質問の型	目的	例	注意事項
Yes/No 疑問文	興味のある話題を見つける 自信を持たせる ある話題にすぐに入る ある話題について話を進めてよいか許可を得る	「スポーツに積極的に参加していますか」 「授業は、好きですか」 「外国に旅行したことがありますか」	続けて使いすぎると、 <u>尋問しているかのような印象を与えてしまう</u> 。 この型の後に、自分の言葉で自由に答えなければならない <u>自由回答型の質問を続けなければならない</u> 。

表 1 のように Yes/No 疑問文 (YNI) について、尋問的になりがちである、「自由回答型の質問を続けなければならない」とあるように、YNI は会話の発展に関しては限界がある、との一般的な見解が述べられており、先ほど言及した会話分析を手法とする文献の主張と食い違いがみられる。この見解の差を再確認する上でも、OPI 談話を詳細に検証する必要性が認められることがわかる。

#### 4. 本調査

##### 4.1 会話資料

本調査では上村コーパスにある計 45 組の母語話者間の OPI 形式のインタビュー資料を会話分析の手法を用いて分析し、考察を行った。試験官は 2 人の女性が日本の同じ地域でほぼ同時期にデータ収集を行ったもので、各インタビューは 15 分から 20 分間の対話で各試験官につき 19 組のインタビューのロールプレイ<sup>(4)</sup>の箇所を除いた会話部分である。インタビューの年齢層は 20 代から 50 代と幅がある。Tester 1 は女性 14 名、男性 5 名と対話を行い、Tester 2 は女性 11 名、男性 8 名と対話を行っている<sup>(5)</sup>。

#### 4.2 分析結果 I (量的考察)

データの全体像を把握する目的で、まず形式別の数値を参考として見てみることにする。YNI が本調査で考察したデータ全体で、「疑問文」の中でも最も典型的な構文である WH 疑問詞の疑問文（例：いつ出かけたんですか？）と、YNI の産出量の調査を行った。表 2 は、19 回のインタビューにおける 2 人の試験官の YNI と WH タイプの質問形式の産出回数の平均値を比較したものである。

表 2 2 名の試験官による YNI と WH 質問の使用回数

質問のタイプ	YNI タイプ	WH タイプ	t 検定値(YNI vs. WH)
Tester 1	21.5	16.2	t(18) = 3.347*
Tester 2	13.05	9.5	t(18) = 2.507*

注：\* は  $p < 0.05$  で有意差があることを示す。

同一試験官の使用を見てみると、YNI タイプの質問文の使用回数が WH タイプよりも有意差を持って多く見られた<sup>6)</sup>。この数値から、OPI 試験官の傾向として「どうして」「何が」などの WH よりも YNI がより頻繁に使用されていることがわかる。つまり、YNI 質問文は「(会話促進には)限界がある」との一般的な理解がなされているのにもかかわらず、2 名とも多く産出しているという観察ができたということになる。どちらの試験官も初心者ではなく、OPI のスキルを熟知しており、外面的な理由で簡単に説明がつく結果ではない。以下、実際の会話例を見ることでその理由を検証していく。

#### 4.3 分析結果 II (質的考察)

OPI 試験官によって YNI が多く採用されているということは、YNI 周辺の会話の展開が一般的な理解のように「限定されてしまう」ものではなく、広がり期待できるものであるからだと予測できる。ではそれはどの

ように起こるのか。この節では、YNIの中でも、回答者であるインタビューイが簡略な肯定・否定返答ではなく、会話の広がり貢献するような返答発話を引き出す効果が観察できた事例を扱い、試験官の YNI の使用にある秩序性を明らかにしていく。

#### 4.3.1 会話の展開の広がりを促す YNI (1) : 埋め込まれた「なにか」

調査対象となった会話資料で繰り返し観察されたケースとして、「なにかご意見おありですか?」「なにかお読みになったことがありますか」といった、YNIに「なにか」という代名詞「なに」助詞「か」が共起した表現句が埋め込まれたものがあげられる。この形式による YNI が投げかけられると、回答者は単なる肯定・否定の応答を提示して終結することはない。例3がその1例である (IR はインタビューア、IE はインタビューイを指す。以下全例文において同様)。インタビューイは40代の女性で、2児の母であることが以下の断片以前の会話で明らかになっている。

##### 例3

- 1 IR : じゃああの(.)ちょっと立ち入ったことで
- 2 IE : いえいえいえ
- 3 IR : あれで申し訳ないんですが, じゃお仕事してらっしゃらなくて,
- 4 IE : ええ
- 5 IR : お子さんを保育園においれになって.
- 6 IE : ええ
- 7 IR : あの幼稚園ではなくて
- 8 IE : ええ
- 9- IR : それはなにか考えた上でなされた事でらっしゃいますか.  
>
- 10 IE : あはい. あの:下の子も申請(.)保育園の申請しておりまして下の子も  
入れましたら仕事を再開する=

- 11 IR : =あ:=  
12 IE : =予定でございましたんですけど  
13 IR : はい  
14 IE : ちょっと倍率, あの一, 1才児は入りたいお子さんが多くって  
15 はいあふれてしまったんですね.  
16 IR : あ(.) そう  
17 IE : で今あい(.) ええ, あくのを待ってるところなので  
18 IR : あ, そう  
19 IE : それでとりあえず一人だけ.

上記の例では、9行目の質問を受けて、まず簡略に「はい」と応対し、「あの：」と発話が継続することを示し、19行目までのやりとりの中でなぜ一番目の子供（10行目「下の子ども」、19行目「とりあえず一人だけ」などの表現からそれが分かる）が保育園に入っているのかを説明している。ここでIE（インタビューイ）はIR（インタビューア）の質問に対してやや複雑な回答をしている。IRは幼稚園ではなく保育園である理由を知りたかったわけだが、IEは「仕事を再開する」という直接的な理由以外にも2人目の子供は保育園に入れなかったので（17行目・19行目）現在は仕事をしていないことも同時に盛り込んで回答している。19行目までの間、IRは相づちや先取り発話（15行目「あふれてしまったんですね」）で共話を構築しながら（水谷 1993）拡張型の回答を聞き手として促しているのが見て取れる。「なにか」は、聞き手に複雑な事情が存在することを前提としていることを暗示している。その「前提」が、話し手に単純な肯定・否定以上の返答を義務化する機能を果たし、9～19行目に見られるような会話のひろがり参加者が相互構築しているのである。

#### 4.3.2 会話の展開の広がりをもつ YNI (2): 質問の「前置き」

YNI の出現後にインタビューイがなぜ積極的な発話を展開するのか、YNI が挿入される箇所以前の会話の展開を見ていくとその根拠が見つかる場合もある。以下の例 4 で実証していく。この断片では、インタビューアが「仕事と子育ての両立は大変だと思いますか」と言った質問を 2 に投げかけている (5~7 行目)。答えは「そう思います」や「ええ、でもそれぞれの場合によるでしょうね」などと簡潔なものであっても良いわけであるが、例 4 の 8~17 行目の発話のように、IE の自己開示情報含めた比較的長い返答が観察された。

##### 例 4

- 1 IR : その、女性、ま、今女子大生の就職難って言われてますけども
- 2 IE : ええ
- 3- IR : その女性でお仕事を持っていらっしゃって  
>
- 4 IE : ええ
- 5- IR : その家庭、その特にその子育て=  
>
- 6 IE : =ええ=
- 7- IR : =の両立というような事は、やはり大変だと思われませんか。  
>
- 8 IE : ん、ま、家族の協力いかんだと思いますけれど
- 9 IR : ええ
- 10 IE : うちの夫はあの何もしない人ですので
- 11 IR : はあ
- 12 IE : ちょっと大変でしたね。子どもがああ、熱を出したときに
- 13 IR : うん
- 14 IE : 仕事は休まなきゃいけないし
- 15 IR : はい

- 16 IE : ええ, 突然起こりますから 3, 4 日のブランクがあるととりかえすのが  
 17 すごく大変でした.  
 18 IR : はあ

インタビューアの YNI の提示の仕方についてここで見てみよう。5～7 行目「家庭、(その) 特に子育ての両立というような事はやはり大変だと思われませんか。」が YNI の核となる質問であるが、それまでに IR はさまざまな「前置き」をしている。1 行目で一般論としての女子大生の就職難について述べ、3 行目でインタビューイ自身が仕事をしながら子育てをしていることに触れている。この *building blocks* (積み木) 形式の質問の導入の仕方が、IE の回答の仕方を左右し、10～17 行目で「私事語り」(串田 2006) として返答がなされた。この語りによって、会話の展開はインタビューイの自己開示を含んだより広がりを持つ発話抽出が成功している。

#### 4.3.3 会話の展開の広がりをもつ YNI (3) : 否定回答

上記の 2 節では、「なにか」や前置きによって IR が期待する回答の形が構築されることを実例で示した。この回答の方向性を、安達 (1999) は質問の「傾き」と呼んでいる。本研究で考察した資料では、その「傾き」を持つ YNI が投げかけられ、その回答が「否定」である場合、インタビューイの発話が長くなる傾向が見られた。次の例 5 が否定回答の例である。アメリカ在住のインタビューイが、アメリカ人達は週末にパーティなどをやっているが、自分は苦手なのだと述べたのを受け、日本人は回りにいないのか(日本人の友達と過ごせばいいのではないか)、と YNI を投じた際の発話である。例 5 では回答者が直接的に否定回答を提示するのではなく、事情を婉曲的に説明することで、7 行目で質問者側から「それ

は（日本人が）少ないですね」と否定回答をインタビューアに先読みさせた形で抽出している。

例 5

- 1 IR : ああ: ああそちらにはあの: (.) 日本人の方はあまりいらっしゃいませんか？
- 2- IE : 日本人を(.) は あの学生: が 4 人ですかね今.  
>
- 3- ほんで町にも何人かいるらしいんですけど,  
>
- 4- うんちょっと: あの面識: (.) ああ一人だけ:  
>
- 5- しか知らないんですが. まあ町にも 5 人ぐらいはいるらしいんですけどね.  
>
- 6- あのー: なんていうか, 結婚されて来られたかとか,  
>
- 7 IR : はい ええ. う:ん, それは少ないですね.
- 8 IE : そうですね
- 9 IR : う::ん.
- 10 IE : ええ:

2～6行目のターンの構築デザインを詳細に見てみると、まず2-3行目で「日本人は居ることにはいる」と、インタビューアの提言に一部賛同する (partial agreement) 情報を提示している (Pomeranz, 1984)。3行目の文末で「～けれど、」と発話が未終了であることを示し、4行目で「うんちょっと:」と遅延マーカ―を前振りに挿入し、「その日本人達とは面識がない」ことを述べている。5～6行目でも、2～4行目と同様に「町にも日本人はいるらしい」と述べてから「彼らは既婚者である (週末に一緒に時間を過ごす相手ではない)」というように、[部分肯定>否定回答]という

パターンを繰り返した発話構成となっている。否定回答をすぐには提示せず、あえて質問者の意図に沿うような内容を提示してから返答をするので、発話は長くなる。なぜこのような遠回りな会話行動を取るのかについては5.2で議論を展開することにする。

#### 4.3.4 会話の展開の広がりを促す YNI (4) : 属性 (attribution) の提示

4つ目の傾向としてあげられるのは、質問者であるインタビューアがインタビューイの性格、特徴、価値観などの個人の属性 (attribution) を推測し、その確認を行うために YNI を使用した場合である。このケースも、「はいそうです」などの単純な返答は見られず、質問者の推測内容を少し拡張させたり、新情報を付加したりといった比較的長い発話が観察された。以下の例6がその一例である。

##### 例6

- 1- IR : そうすると、やっぱり高井さんの場合は、長いこと、日本語教育に  
>
- 2 IE : そうですね
- 3- IR : 携わっていらしたってことが結構 土台になっている訳[ですね。  
>
- 4 IE : [なっ
- 5 すね。結局、私の場合はあの日本語教育に入った時点から
- 6 IR : ええ
- 7 IE : その: アメリカ人の学生、大学生と接していましたから、だから
- 8 その彼らからアメリカの情報を得て(.) その中でまあアメリカを考え
- 9 当然言葉を教える場合にそのいわゆる
- 10 IR : そうです うん
- 11 IE : ボキャブラリーだけでないですからね
- 12 IR : うん

- 13 IE : その語彙である
- 14 IR : そうですね
- 15 IE : その: よく言いますがアメリカにきますとよくアイラブユ: という表  
をしますけど
- 16 IR : ええ
- 17 IE : 私たち日本人にあなたが好きですなんてほとんど毎日言いませんから  
ね
- 18 IR : ええそうですね
- 19 IE : まあそうすれば(.) そういった言葉をどういった形で
- 20 IR : うん
- 21 IE : 日本人が表現しているのだろうか
- 22 IR : うん
- 23 IE : まああるいは (.) 表現しないとすればそれに代わるものは何だろうと.
- 24 IR : うん
- 25 IE : そういったところがひとつの始まりになっているのかな(.) と.

この例では、IR が 1~3 行目で現在アメリカの大学院で研究している課題は日本語教師としての過去の経験が「土台となっている」という IE 個人の属性が定式表現化されて<sup>(7)</sup>述べられている。この YNI は肯定または否定回答で情報の確認を求める質問である。それを受けて、IE はその「土台」とはどのようなことを具体的に指すのか、肯定回答という形で (4 行目「なっていますね」) 返答し、続けて詳細な説明を提示する。ここでなぜ「そうです」などの単純な肯定回答で終らなかったのだろうか。Bilmes (1989) は、属性への言及は、その属性の承諾か拒否という言語行為の隣接ペアを構成すると述べている。上記の例 7 ではその隣接ペアの第 2 項として「承諾」が選択されており、その承諾の根拠として 4~25 行目のような拡張した発話がなされているのである。

## 5. 討論

以上、本稿では OPI 試験官の YNI の使用が予想外に多いことを示し、質的分析として 4 つの YNI の類型にまつわる会話の展開を考察した。それぞれのケースで実例をもって解説を行ったが、本節ではそれぞれの類型を個々に観察するのではなく、全体像として会話の展開を促進する YNI についてどのようなことが分かったのかを敷衍していく。

### 5.1 YNI の「傾き」を指標する要素

4 つのいずれのパターンにおいても、YNI 形式の質問に対する回答にある一定の方向付けがなされる要素、つまり「傾き (bias)」が見いだされた。その「傾き」は、YNI の文構成自体にその要素が埋め込まれている場合もあれば、前置きとなる文脈 (テキスト) がその「傾き (bias)」を示唆している場合もあった。安達 (1999) では前者 (文の構成) としての真偽疑問文 (とくに否定疑問文) について考察し、文法的な傾きのある疑問文の特徴に関する解説がなされている<sup>(8)</sup>。本稿で観察した「なにか」+YNI の共起も、回答内容にある一定の傾きをもたせる効果をもつ文法構造的な特性の一つと考えられるだろう。

後者である前置きや、全体の流れが「傾き (bias)」となるケースに関しては、会話分析を用いた研究<sup>(9)</sup>に示唆がある。Schegloff (1980) は質問にいたるまでの背景情報の組み立てを行うやりとりを *preliminary to preliminary (pre-pre)* と呼ぶ。この最後に提示される質問へと導く段階で、回答発話の方向付けがなされる。*pre-pre* の段階のやりとりに参加することが、質問の傾きを自動的に受容することを意味するため、インタビューはその回路を脱して回答することが非常に困難になる。これらの「傾き」を指標する要素によって、YNI が単に肯定か否定かを問う単純作業でなくなることが分かる。YNI という質問発話が構築する「発話媒体行為」は質問者 (インタビューア) と回答者 (インタビューイ) の相互行為

によって交渉され、「傾き」が認識されると結果として長いやりとりが展開するのである。

## 5.2 YNI と質問の肯定回答への嗜好性 (Preference)

会話の秩序性の特徴の一つとして、YNI への回答は、肯定回答が好まれる（つまり否定回答への非嗜好性がある）という、そもそもの傾向があるとの指摘がなされている (Sacks, 1987)。例えば以下のような例である。

### 例 7 Sacks (1987:60)

A : that's where you live? Florida? (そこで住んでいるのですか？フロリダで？)

B : that's where I was born. (そこは私が生まれたところです。)

Sacks (1987) は、上記の例において、なぜ B が「いいえ、カンザスです。」などと返答せず、わざわざ「フロリダは生まれた場所だ」と述べなければならないのかに着目した。“No. No it's not. (いいえ)” といった直接的な否定回答を回避するために、話し手は様々な言語行動を取る傾向にある。上記例の B は、ここからさらにどこに住んでいるのか、正しい情報を伝えなければならない。つまり、否定回答であった場合の修正には、この肯定回答への嗜好性のために、話者は多大な努力を要する（発話量が多くなる）ことになるのである。例 5 の会話断片で観察されたように、YNI の嗜好性に反する回答を行う場合、部分肯定などのステップを踏みながら最終的に否定回答を行うため、結果として拡張化した回答発話を抽出する原因となっているのではないだろうか<sup>(10)</sup>。

## 6. 今後の研究と日本語教育への示唆

本稿では、質問発話の一例として YNI を取り上げ、一見簡易な質問形態のように見えるのだが、実際の会話の展開は複雑なものであることを実証した。先に言及した Schegloff (1984) の「どのように質問という社会的行為が達成されたか」を詳細に見ていくと、YNI とその形式の使用と共時的にインタビューが構築する会話の運び方が、インタビューに単純返答で終らせない環境を導いていることが分かった。YNI に限らず、質問発話というものは形式を超越した観点で考察を進めていかなければその実態がつかみきれないことを本稿は示している。

この会話の構築に見られる単純な回答で終らせない「一工夫」は、YNI や他の疑問形式の発話がいかに応用して質問をするか、また質問の意図する会話行動をいかに敏感に察知することができるか、という学習者の「インタラクション能力 (interaction competence)」を考える上でも有益な発見であろう。筆者が日本の大学・大学院で日々接する高度な日本語の言語知識を持つ留学生にとっても、YNI の「傾き」をうまく察知する能力の習得は、予想以上に困難なものようである。高度な言語能力を持つ学習者でも習得困難な、言ってみれば「文脈 (空気) を読み取る」力を身につけるには実践的な訓練の積み重ねが必要なのだろう。本稿で述べた YNI に至るまでの会話の展開などから質問の「傾き」に気づき、さらに適切に反応するという行為は、学習者にとって非常に難解な作業である。学習者には、会話全体の流れの把握や、YNI と共に使用されている「なにか」などの表現のように「傾き」をほのめかす質問者が盛り込む繊細な「コンテキスト化記号 (Gumperz, 1982)」に気がつくだけの言語運用能力が必要とされる。

教室内における構文重視の「指導」が妨げになっているのではないか、という声もある。教室での指導や教科書でも、質問文の構文の作成自体にこだわり、会話の連鎖までを考慮した訓練を同時にすることは滅多にな

い。この形式重視の視点が、上級レベルに達した学習者にとっても、「傾き」を察知する能力養成の妨げとなっているのではないだろうか。大浜 (2004) の冒頭で、奥津 (1989) の、問：「あなたは韓国人ですか？」答：「はい。」という日本語学習者同士の会話によく遭遇するとのコメントが引用されている。この回答はたしかに誤用ではないが、なにかぶっきらぼうな感じがする。奥津 (1989) は、この様な不自然なやりとりには「あなたは韓国人ですか」というような疑問文に対して「はいそうです」「いいえ、ちがいます」のような単純な応答や、疑問文の述部の繰り返しである「はい韓国人です」などといった紋切り型の返答をモデルとして提示している教科書や、単純化しすぎている指導が原因となっているのではないかと指摘する。

最後に、本研究で残された課題と今後の研究の展開について述べておきたい。本稿で扱ったのは OPI 形式の母語話者同士の会話資料であるが、今後は実際の学習者との OPI データに関しても同様な考察を進めていく必要があるだろう。本調査の資料の OPI 試験官達は母語話者が務めるインタビューアと対話する際も、OPI の定める一定のインタラクションの進行を行っているが、多様な背景と対象言語の熟達レベルが異なる学習者が相手であることで、多少の変動がないはずはない。大別すると、(1) 学習者が対話の相手であるとき、観察される試験官の YNI 形態や使用傾向が変化するのか、そして (2) 学習者の口頭能力（および総合的な言語能力）とともに、YNI を処理する相互行為能力がどのように変化するのか、の2点が今後の研究課題となる。日本語学習者が質問という会話行動を理解し、使用する能力をどの段階でどのような過程を経て習得するのかについては未だ十分な研究がなされていない。文法形式としての疑問文の理解ができるだけでは、質問発話に対する適切な応答が保証されないことが、石田 (猪狩) (2001) でも指摘されている。より実践的な日本語教育への還元を図るためにも、質問発話とその周辺の会話の展開の仕組みが明らか

にされる必要があるだろう。質問は、話し手一人で完結できない相互行為、コミュニケーションの最も基本的な活動である。だからこそ、第二言語におけるコミュニケーション能力習得の向上に関心がある教育者・研究者（筆者を含む）は今後もこのテーマについてさらに探求していくべきだと考えている。

## 注

1. 上村隆一（編）（1998）「文部省科学研究費補助金重点領域研究：日本語会話データベースの構築と談話分析」『じんもんこん DATABASE』神奈川：重点領域「人文科学とコンピュータ」総括総合研究大学院大学 Vol.1
2. 日本語 OPI 研究会のホームページによると、1991 年 8 月には国内で資格を取得したテスターが中心となって、テスターとしての研鑽の場として「日本語 OPI 研究会」の前身である「ACTFL-OPI の会」が発足しているとのことである。
3. マニュアルでは、本稿では一つのまとまりで扱う、疑問を表示する終助詞（「か」「の」）を伴わない質問形式は「イントネーション疑問文」「付加疑問文」として一部指摘がある。
4. 本調査では、ロールプレイは第一に選択された役割や設定によって質問を行う者が必ずしもインタビューアではない場合があること、第二に、質問の形がロールプレイのプロットに合わせた形態でのみ産出されることから、即興性に欠ける場合があると判断した。この二点の理由から、分析の対象外とした。
5. 上村コーパスでは、同じ OPI 試験官が同様に会話を展開していることから、比較可能なサンプルとして提供されている。日本語母語話者がインタビューの相手となっている会話であり、様々な言語運用能力を持つ学習者を相手とする会話におけるインタビュー者の対応が全く同じであるかどうかは再考の余地があるだろう。本プロジェクトは母語話者サンプルのみを扱ったため、その検証は行わなかったが、学習者サンプルとの比較を検証する際には、まずこの過程を経るべきである。しかし、OPI というインタビュー形式を踏襲した形式で行われた会話である以上、その会話上の制約は相手が母語話者であろうが学習者であろうが同様に課されるはずである。この点において本研究の考察結果は学習者のデータを扱う際にも参考になる。
6. YNI と WH タイプの質問発話の他に、中途発話形式の発話（例：「去年は？」）も観察された。どの発話がどのようなタイプの「質問」として認識されるのかは、YNI タイプの質問文の考察の域を超えるものであり、これに関する議論は稿を改めて行いたい。
7. 前田他（2007: 29）によると、定式化表現（formulation）は「ある出来事を、言語を用いて公式化したり、定義したりという科学に代表される活動」と、その表現そのものを指す。このような定式化は日常の行動の中でも観察でき

- る実践的な行為である。
8. 例えば、安達（1999:60-61）は、通常使用すると不自然となるガ格名詞句の主語が、「傾き（bias）」をもつ否定疑問文では可能になると述べられている（例：「警戒 {は/が} 厳しくなかった？」）
  9. 会話分析は、1970年代にサックス・ハーベイなどのインターアクションの社会学者達によって発展を遂げ、現在に至るまで社会学以外の分野でも援用されている分析法である。会話分析の視点の根底にあるのは、日常会話の社会的秩序性を解明することである。
  10. 近年この肯定回答への嗜好性を踏まえた研究論文が多く発表されている（Houtkoop-Steenstra & Charles 1998; Raymond, 2003 等）。

### 参考文献

- 安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 石田（猪狩）美保（2001）「OPI データに見られる日本語学習者の応答プロセス」『横浜国立大学留学生センター紀要』8, 横浜国立大学留学生センター 65-78.
- 大浜るい子（2004）「日本語の自然会話における真偽疑問文と応答詞「はい」の関係について」『日本語教育』123 : 37-45.
- 奥津敬一郎（1989）「応答詞」「はい」と「いいえ」の機能『日本語学』第8巻8号4-14.
- 鎌田修・川口義一・鈴木睦（編）（1996）『日本語教授法ワークショップ』凡人社
- 串田秀也（2006）『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共 - 成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
- 戸田貴子・カッケンブッシュ寛子（1999）「中間言語における外来語アクセントの形成と日本人話者による評価」カッケンブッシュ寛子研究代表『第二言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成 8-10 年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘（2007）『エスノメソドロジー・人々の実践から学ぶ』新曜社

- 水谷信子 (1993) 「『共話』から『対話』へ」『日本語学』12巻4号4-10.
- メイナード泉子 (2004) 『談話言語学-日本語のディスコースを創造する 構成・レトリック・ストラテジーの研究-』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪則行 (1992) 『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版
- 横山紀子・木田真理・久保田美子 (2002) 「日本語能力試験と OPI による 運用力分析:言語知識と運用力との関係を探る」『日本語教育』113, 日本語教育学会 43-52.
- Bilmes, J. (1988). The concept of preference in conversation analysis. *Language in Society*, 17:161-181.
- Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Houtkoop-Steenstra, H. and Charles A. (1998). Creating Happy People by Asking Yes-No Questions, *Research On Language and Social Interaction* 30, 4, 285-315.
- Ikeda, K. (2007). The change-of-state token in Japanese language proficiency interviews. *Second Language Acquisition - Theory and Pedagogy: Proceedings of the 6th Annual JALT Pan-SIG Conference*: 56- 64.
- Johnson, M. & Tyler, A. (1998). Re-analyzing the OPI: how much does it look like natural conversation? In Young, Richard, He, Agnes (Eds.), *Talking and Testing: Discourse Approaches to the Assessment of Oral Proficiency*. Benjamins, Amsterdam, pp. 27-52.
- Kasper, G., & Ross, S. (2007). Multiple questions in oral proficiency interviews. *Journal of Pragmatics*, 39(11): 2045-2070.
- Kasper, Gabriele, Ross, Steven J. (2003). Repetition as a source of misunderstanding in oral proficiency interviews. In House, Juliana, Kasper, Gabriele, Ross, Steven (Eds.), *Misunderstanding in Social Life: Discourse Approaches to Problematic Talk* (pp. 154-172). Longman, London.
- Pomeranz, (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/ dispreferred turn shapes, In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.),

*Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis* (pp. 57-101).  
Cambridge: Cambridge University Press.

- Raymond, G. (2003). Grammar and social organization: Yes/No interrogatives and the structure of responding. *American Sociological Review*, 68:939-967.
- Rose, K. (1996). Formulae and inter-interviewer variation in oral proficiency interview discourse. *Prospect*, 11 (3): 3-15.
- Sacks, H. (1987 [1973]). On the preferences for agreement and contiguity in sequences in conversation. In: Button, G., J.R.E. Lee, eds., *Talk and social organisation*. Clevedon: Multilingual Matters: 54-69.
- Schegloff, E.A. (1980) Preliminaries to Preliminaries: "Can I Ask You a Question," *Sociological Inquiry*, Vol. 50 pp.104 - 152.
- Schegloff, E.A. (1984) On some questions and ambiguities in conversation'. In: Atkinson, J.M. & J. Heritage, eds. *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis* (pp. 28-52). Cambridge: Cambridge University Press.

参考ホームページ URL

<http://www.opi.jp/shokai/gaiyo.html>